

I C A（国際協同組合同盟）委員会への出席の旅から

富山県農業婦人組織協議会長 竹部 喜代子

第4回全農婦協海外研修は、一行21名が平成元年10月2日に出発し、国際協同組合同盟（I C A）中央委員会開会式及び同婦人委員会に出席し、引き続いてインドとタイにおける婦人の協同活動及び農協活動の視察を行って全日程を終え、10月12日に帰国しました。

今回の研修は、全中国際部より「I C A婦人委員会に仲間入りしたことを契機に、みなさんで出席し、国際的視野を広めてきたら」との降って湧いたような呼びかけがあり、急遽、理事会にはかり、総会において実施を決定していたのでした。これは、平成元年2月全農婦協代表の私が初めて委員に登録され、毎年開催されるI C A婦人委員会への出席をうながされたことによるものです。

インド・ニューデリーで開催されたI C A中央委員会は、10月4日ビギャン・パワン会議場で開会式が行われ、団員全員がオブザーバーとして出席しました。私達が着席しますと、四季のうたにつづいて山形県民謡の真室川音頭が吹奏されるという思いもかけないインド楽団の勧迎に一同胸を熱くしました。

開会式は、世界74ヶ国から集った700名を超える代表者たちが見守る中、ラジク・ガンジー首相による神に光を捧げ感謝の意を表わす点火の儀から始まりました。インド農業大臣からは「ネール元首相が協同組合運動は生活の基礎であるとして運動を興された。今年はネール首相の生誕百年祭にあたり、これを記念としてアジアで初めてこの中央委員会が開催されたが、これを機会に開発途上国の発展

に寄与したい」とのあいさつに続き、ガンジー首相の歓迎あいさつ、I C Aマルコス会長あいさつと次々に進み、最後はインド国家の吹奏を以って終了しました。11時から始まり僅か50分間でしたが、国際色豊かな中で実におごそかにとり行われました。

I C A婦人委員会は4日の午後から始まりました。この委員会は各国I C A会員団体から指名された36ヶ国を代表する76名で構成されており、日本からは新たに漁協・農協の婦人が加盟しました。なお、1976年からは日本生協連竹井副会長が登録され現在は同湯浅理事に引き継がれています。翌10月5日の婦人委員会は会場も広く、同時通訳の設備がありましたのでオブザーバーとして出席した農協婦人部研修団員と生協の方々、会議の内容を十分に理解することができました。正式メンバー数に匹敵する日本人のオブザーバーの来場に、議長ノラ・ウイリス女史（イギリス）は大変嬉しいと大歓迎をされました。

経過報告の中で

「1979年の国際児童年に「バケツ一杯の水キャンペーン」を行ったが、全世界で50万USドルが集った。うちの三分の一が日本の農協婦人部からの寄贈額であり、その行動力は素晴らしい」と称えられ、遠いインドの地で日本の農協婦人部の活動が高く評価されたことを耳にする感激はひとしおでした。

会議のテーマは「東南アジアの女性と協同組合」となっており、まず参加各国委員の活動の報告を求められ私が第一番に指名を受け

日本の農協婦人部活動と運動のあゆみを報告したところ「日本の婦人達の活動は着実に立派だ」と大変好意的な評価を受けました。各国の発言が相次ぎ、いずれも婦人の地位向上にむけて協同運動に挺身している様子が熱っぽく語られ、悩みは日本と共通した点も多く協同運動の活性化と幸せづくりを追求する仲間として近親感を覚えました。

さて、インドでは、インド全国酪農開発局のマザーデリー工場の牛乳処理過程を視察し、続いてアグラ地方にあるスウェーデン全国協同組合センターとインド協同組合中央会が婦人教育のためすすめているプロジェクトの皮加工場でのメッシュ靴づくりと、買物袋などの小物づくり、スパイスづくりの作業を視察しました。ここで働いている女性はカーストの一番下のレベルを対象としておりいずれも35～6人の婦人の集りで、年齢は18才位から年寄りまで幅広い年齢層のグループでした。又その中のあるグループでは、夕方からは年寄り達に若い子が文字を教える教室を開いているとのことでした。協同作業を通して婦人の経済力を養い、暮らしを豊かにし、文盲者のための教育をすすめるなど、婦人の地位向上にむけた活動を真剣になってすすめていました。

タイでは、国際協力事業団から派遣されている石橋健二氏の案内でマノロム農協を訪問し、農協指導事業について農協組合長をはじめ担当者から説明を受け管内を視察しました。水田には稲が青々と育ち灌漑用水に豊かに水が流れており、また、男性がその役割を担っているという放牧の小牛を追い乍ら草を食べさせるのどかな光景がひろがっていました。視察・交流では、婦人グループ員が集り竹細工づくりやある種の植物を染めてござを編んでいるニカ所の作業場を訪問しました。この婦人達の作製品が市場で評判が良く、よく売れ、その収入が農協に貯金されて農協を発展させているとのことでした。管内どこを巡っ

ても生産面での農協指導策を説明され、農家の住宅は文化的ですっきりしており、豊かで平和な農村という印象を強く受けました。

両国の現地をみて、国が農業を重視し、農村振興対策に力をそそぎ、婦人の活力を協同の場に引き出し特産物を作り出し、協同活動として発展させ、豊かな農村の暮しづくりを進めているいわば国を挙げての姿勢がよく分りました。

ここで、今回の訪問国インド・タイ・シンガポールでの印象の一端を綴ってみましょう。

インドで使われている言葉は、400とも800とも言われ、ニューデリーに住んでいる中流以上の家庭の子弟は、学校での公式用語はヒンズー語であり、そのほかに英語を習い、家庭では両親の出身州の言葉で話し合うので、少なくとも三カ国語はマスターしていると言われていています。仏陀の誕生聖地としてしかインドの知識を持たずにこの国に入りましたが、仏教徒は1%にも満たないことに先ず驚きました。ヒンズー教徒が90%近くを占めると聞き、公式用語として使用されている謎がとけました。

面積は日本の9倍、人口は世界第2位で7億人といわれていますが、街や重要道路のまわりは人々であふれ、子供や若者達の多いのに目を見張りました。女性達の美しいサリー姿にまじり牛も悠々、ワン公も堂々と歩調を揃えて歩いており、異和感の全く無いのも不思議でした。富める家も貧しき家も軒を並べ、優雅に着飾る婦人もよごれた衣をまとう人も、蔑視眼もなければ卑下感もなく、互に自由に天衣無縫とも言える表情で行き交う様に、まだ見ぬ天国の相と相像する自分を、老化のせいとふり払いつゝ「ヒンズーの教えによって人々の心が自分の生活に満足し切っているからです」というガイドの言葉に吸い込まれるよう耳を傾けたのでした。

たまたま、協同組合婦人プロジェクトに案内していただいたインド協同組合中央会のム

カジ女史に、結婚について尋ねてみました。カースト制度のきびしいところですから親の選んだ相手を大方の人が選びます。結婚は、男性が相手の女性の家に入夫し夫婦で妻の家の農業を手伝いながら働き、自立への備えをして永住地を見つけて親元から巣立っていくしきたりで、姉妹が上から順に結婚・独立をしていき、末子の女子が夫を迎えて両親と暮らしていく習わしとのことでした。日本で言われる嫁・姑問題は殆どこでは通用しないことになるようです。

さてこの旅で、計らずもシンガポールとタイを再度訪れる機会に恵まれました。17年前の交換会で、青年達が国の発展に努力していると熱心に語るのを聞き、同行した県の青年達はその愛国心の強さに刺激を受け、彼等のようにとてもなれないと悩んでいました。あの日の青年達が理想国家建設を目ざして邁進した結果今日の発展があるものと思えぬ感概もひとしおでした。観光バスにたかる様集ったはだしの子供達の土産売りが「千円、千円」と叫んでいた姿は今は消えて、素晴らしい文化都市へと変容してしまいました。国を挙げて国際都市づくりを目ざしていたシンガポールの当時の市民生活は、清掃心が旺盛でどんな小さなゴミも見つけることが出来ない程でしたが、今はひっきりなしに訪れる観光客への対応で掃除は人まかせにする慣習に変わったのでは、と感じたのも観光コースのみの通り過ぎであったからでしょうか。

また、当時タイのアユタヤで、ぼつんとした木の茂みに囲まれた農家集落を訪ねると、20数人余りの女や子供達が生みたての水牛の糞の山の点在する中でたむろしており、私達をととても好意的に迎え入れて家の隅々までみせてくれ、雨期を待って植えるという水稻苗をみせてくれました。翌日、水上マーケットから細い水路に分け入り、案内された農家には、メナムの流れを利用してつくられた稲に穂が出ており、5月という季節に農家毎の技術で色々なつくり方の出来るこの国の天恵に、日本にない豊かさを感じたものでした。今回の旅ではかつての自然農法作りは見当らず、農業技術が進歩し、農業用水路がつけられ、協同組合が建ち、農家は文化住宅となり電化製品がおかれ、文化生活を営み、17年間の歳月が農村・農家生活の風貌をすっかり変え、発展しておりました。

旅を重ねて、発展の尺度は国々に合わせて考えるべきと学びました。両国の発展振りは日本の発展に比較しても劣っていないことに気付かされ、人口の高齢化対策を課題とする日本に比べて何と子供達や若者の多いことか。重労働を厭わぬ人々があふれるたくましい国力を見て、日本はこれでよいのか、とのあせりを感じました。GNP世界第一に酔うことなく、飽食に流されず、節度ある暮らしを追及して心の豊かさをつくることの大切さを考えさせられた旅でした。



図1 ICA中央委員会開会式儀式で
点火するガンジー首相



図4 バリケース・ウーマン・コーポラティブ・ソ
サエティにおいてスパイスをひく女性（イン
ド）



図2 ICA委員会にて、日本の活動を報告する
筆者



図5 農村に走るトラクター(タイ国内には、トラ
クター生産工場もある)



図3 燃料や壁にも使われるという牛ふんの山
か？（インド）

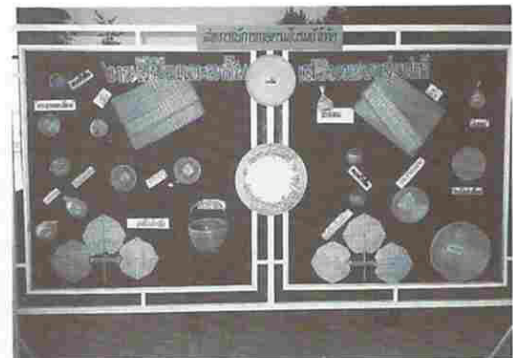


図6 チャイナート県マノロム農協管内の女性手
工業グループの竹細工作品



図7 タイの水瓶, 10年前に訪れた時は, 瓶は小さいものばかりであった。又瓶の数により貧富の差がわかった。それに比べ何と大きい瓶になったことか。



図9 タイの民族舞踏の人達と(劇場にて)



図8 マノロム農協管内にあった水上レストラン



図10 メナム川のほとりの住居, 10年前はヤシの葉の屋根だったが, 今はトタンぶき, 舟もエンジンつき